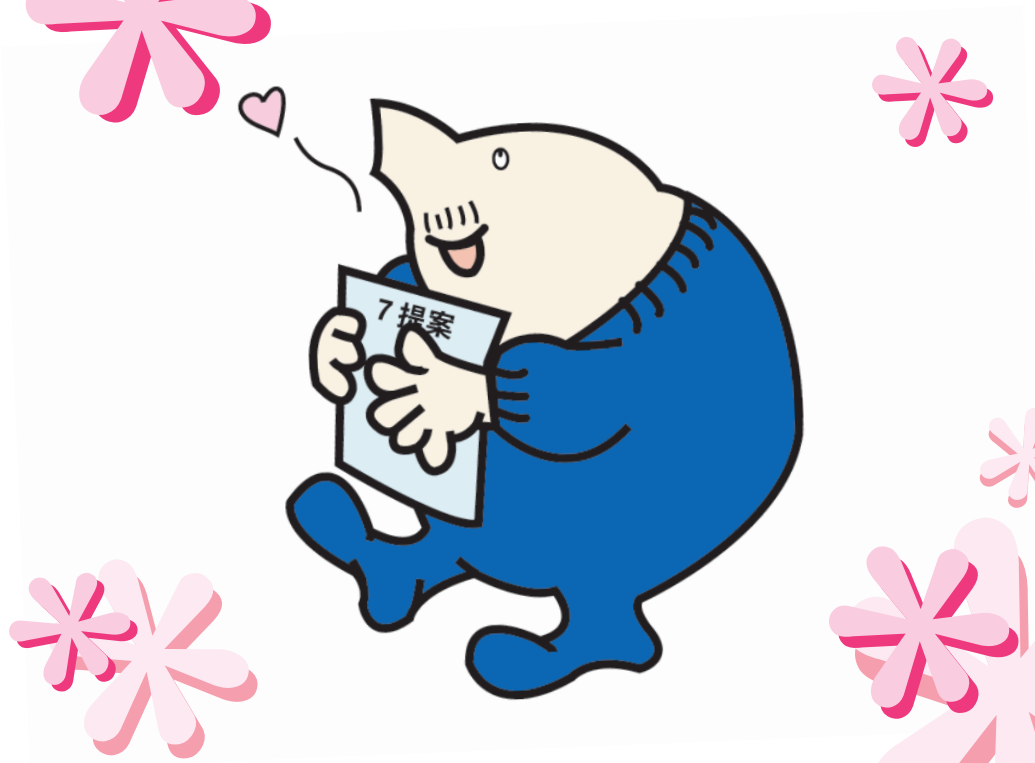
ISBN978-4-901730-98-3

ティップス先生からの７つの提案

教務学生担当職員編



名古屋大学
高等教育研究センター
学務部学務企画課

ティップス先生からの7つの提案とは

本冊子は、よりよい教育を実現するための具体的方法をまとめた『ティップス先生からの7つの提案』の5番目の冊子です。これまで名古屋大学高等教育研究センターは、教員編、学生編、大学編、IT活用授業編の4冊子を発表し、教員、学生、大学組織が、それぞれの立場から教育の質向上のために何を実行したらよいのかを提案しています。

5番目にあたる本冊子は、教務学生業務を担当する大学職員という立場から、よりよい教育を実現するための提案と具体的なアイディアをまとめたものです。これまで、個々の教員と学生では解決できない組織的な教育の質向上のための取り組みは、大学編にまとめられていました。大学編の中には、大学執行部、図書館職員、教務学生担当職員などの取り組みが総合的に含まれていました。今回、名古屋大学の高等教育研究センターと学務部学務企画課が協力して、教務学生担当職員は教育の質向上のために何ができるのかを検討し、独立した冊子としてまとめることができました。

大学教育の質向上という大学の目標を遂げるために、大学職員は重要な役割を担っています。考えてみれば、大学時代の学生の学習や発達は、授業という枠には収まらないものです。部活動、地域活動、留学なども学生を成長させる貴重な経験です。卒業生が自らの発達の源泉を語るとき、その範囲は授業という枠を大きく超えています。授業、課外活動、日々の大学生活など、学生の多様な活動に関わっている大学職員は、学生の発達のさまざまな側面を見ることができ、効果的に学生を支援することが可能なのではないでしょうか。

また、教務学生担当職員は学生にとってキャンパス内で身近に接する大人であり、社会人として働く姿を見ることのできる数少ない存在でもあります。教務学生担当職員がそのことを意識しながら学生と接することにより、社会に羽ばたく準備に一役買い、さらなる教育的効果を生むことも期待できるのです。

この冊子では、学内外での調査を通じて教務学生担当職員の優れた実践例を収集し、これまでの『ティップス先生からの7つの提案』の枠組みに基づいてそれらを整理し、簡潔な表現にまとめて提供しています。この冊子のねらいは、優れた実践と知恵を広く共有するための枠組みを提供することにあります。ですから、この冊子に挙げている項目は、職員や部署の評価を目的とするものではなく、ひとりひとりの教務学生担当職員が日々の実践を少しずつ豊かにするための素材です。項目の中には資源や環境などが整っていないために、残念ながらすぐには実現できないものもあるかもしれません。それらは、どのようにしたら実現できるのかについての議論につながってゆけばと考えています。

教務学生担当職員編を制作するヒントになったのは、米国の2つの大学職員の専門職団体が共同開発した『学生担当職のための優れた実践の原則』でした。この既存の開発物を参考にしながら、コンセプトを発展させ、さらに日本の大学での活用をめざしたものが、この教務学生担当職員編です。開発にあたっては、年齢、キャリアも異なる多くの名古屋大学の教務学生担当職員からアイディアを収集し、一緒に検討を繰り返してきました。

このように開発した教務学生担当職員編が加わることにより、『ティップス先生からの7つの提案』には、学生、教員、職員という大学の主要構成員が揃いました。それにより、すべての構成員が教育の質向上という目的に向けて連携し協働するという『ティップス先生からの7つの提案』のコンセプトが、より明確になったと考えています。

ティップス先生からの7つの提案の使い方

この冊子の使い方としては、以下を想定しています。

1. 7つの提案は、覚えやすい簡潔な文章からなっています。あなたが日頃気をつけていること、努力していることを整理して、体系化するための枠組みとして活用できます。
2. この冊子の中にある49のアイディアの中には、あなたがこれまで実践したことのないような項目も含まれているでしょう。そのなかにご自分の職場での活動に取り入れてみたいものがあったら、ぜひ実践してみてください。とりわけ、それぞれの提案の中で上の方にリストされているアイディアは、多くの職員にとって取り入れやすいものを選んであります。
3. 『ティップス先生からの7つの提案』には、他の分冊もあります。教員編、学生編、大学編、IT活用授業編もぜひご一読ください。それらの分冊には、同じ目標を達成するために教員、学生、大学組織がそれぞれ何をしたらよいかが書かれています。
4. この冊子に含まれているアイディアはほんの一部にすぎません。さらに優れたアイディアを実践されている方もいらっしゃると思います。あなたが日々職場で大切にされていること、あるいは工夫されていることを高等教育研究センターまでお伝えください。次回以降の改訂に活用していきたいと思います。

提 案 1

学生が教職員と接する機会を増やす

集団の中の一人として見なされるときよりも、個人として見なされるときの方が、学生は大学や授業に対する帰属意識や学習に対する責任感を強く持つものです。自らが進んで学生と接するだけではなく、学生が多くの大学の構成員と接する機会を作り出して、学生が大学の環境にとけこめるように配慮しましょう。

- 窓口に学生が来たらすすんで声をかけ、用件を尋ねる
- 学生の名前をできるだけ覚えるようにして、名前で呼びかける
- 窓口のスペースを広く取るなど学生が立ち寄りやすい環境を整える
- 日常のキャンパスライフに学生が何を求めているのかを聞いてみる
- 講演会などの学内のイベントに積極的に加わる
- 学生や教職員が集うスポーツ大会やレクリエーションに協力する
- キャンパスの構成員として積極的に名大祭に参加し、普段とは異なる形で学生と交流する

提 案 2

学生間で協力して行う学習を支援する

仲間と協力して行う学習は、学習の意欲を高め、学習効果も高いと言われています。教室の内外で学生が他の学生とともに学習活動をすることが容易になるような環境を整備しましょう。また、協力して学習することの重要性を学生に伝えるとともに、自らも学習する機会をもつことで、ともに学ぶコミュニティづくりに貢献しましょう。

- 学生がグループで学習できる場所と利用方法などを把握し、適切なアドバイスをする
- 学生の学習のために学内にどのような機器が設置されているかを把握しておく
- ティーチング・アシスタントやチューターがどのように配置されているかを把握し、学生に有効活用を促す
- 先輩学生からのアドバイスを希望している学生には、ピア・サポーター制度などを紹介する
- 大学に現れなくなった学生に気づいたら、他の学生にさり気なく様子を尋ねてみる
- 身近な学生による学習サークルを支援する
- 普段から学内の教職員と連携し、さらに学外の教職員とも情報交換をする場をもつ

提 案 3

学生の主体的な学習を支援する

大学教育においては、主体的に学習する姿勢を学生に身につけさせることが重要です。フィールドワークやインターンシップなどの教室外の活動も、学生の主体的な学習活動の貴重な機会と捉えられます。学生の主体的な学習の機会が増えることによって、自立性、目的意識、倫理観などの学生の幅広い側面の発達も期待されます。

- 各種研究会やインターンシップなどの情報を学生に積極的に提供する
- 大学や学部の教育目標やカリキュラムについて教員とともに検討する
- 学生から個別に受けた質問を、冊子やガイダンスなどにおける情報提供に活用する
- ガイダンスの内容や方法を検討し、対象に応じたガイダンスを適切な時期に実施する
- 身近なところで学生が自学自習できるスペースを確保する
- 窓口での対応などを通じ、学生に社会人としての常識やマナーを教える
- 大学時代の学生の発達プロセスについての基本的な知識を学ぶ

提 案 4

学習の進み具合をふりかえらせる

学生にとって、どこまで学習目標に到達しているのかを確認することは、その後の学習を進める上で貴重な情報です。また同時に、大学にとっても授業の進め方や教育環境の効果をチェックするよい機会となります。多様な方法で学生の進捗状況を把握する機会をつくり、その結果をフィードバックする仕組みをつくりましょう。

- 履修方法と単位取得状況の確認について、学生の自覚を促す
- 学生の学習履歴が的確にわかるような資料を教員に提供する
- 学生が投函できる意見箱を設置し、改善の要望を把握する
- 授業評価アンケートや学生生活状況調査などの結果について、前回の結果と比較して変化を把握する
- 学習に関する調査結果の反映方法について、教員と検討し実施する
- 学生の学習のために改善した点を掲示等により公表する
- 調査・分析方法に関する基本的な知識を習得する

提 案 5

学習に要する時間を大切にさせる

授業時間外の学習の大切さは広く理解されてきたようですが、どのように時間をやりくりしたらよいかにとまどう学生は少なくありません。時間を有効に活用することは、学生の学習成果を左右する重要な要素です。大学は、効果的な学習時間の使い方をできるだけ早く学生に身につけさせることが求められています。

- 情報は、要点を整理して提供する
- 大学から配布された書類を確認し保存することの大切さを、学生に理解させる
- 学生が用件をどこで相談したらよいかをわかりやすくするために、担当する職務内容をカウンターの上などに表示する
- 公開研究会、休講情報など、掲示板に貼りだしている情報を、学生がインターネットや携帯電話からも見られるようにする
- 授業時間外の学習に利用できる学内施設の活用を促す
- 他の職員の職務にも興味を持ち、積極的に情報の共有に努める
- 業務の進め方に関する事例集を作成し、職員間で共有する

提 案 6

学生に高い期待を寄せる

人は、周りの期待に対して敏感に反応するものです。学生は期待されているとわかったら、学ぶ意欲を高め、結果として学習効果は向上するでしょう。大学生活のさまざまな場面で、学生の学習に対して期待を寄せましょう。さらに、知の共同体である大学の構成員にふさわしい態度や行動を学生に求めるようにしましょう。

- 学生の勉学意欲や課外活動の努力に対し、応援の言葉をかける
- 学内外での受賞・活躍などの学生の功績を周知し、本人や周囲の学生へのさらなる刺激とする
- 学生の優れた社会的活動をサポートする
- 卒業生の活躍を積極的に学生に紹介する
- 論文コンクールなどへの応募を促す
- 大学の構成員にふさわしい振る舞いを学生に期待する
- 学外の協力者に対する礼儀を学生に求める

提 案 7

学生の多様性を尊重する

大学はさまざまな学習スタイルや属性を持った学生を受け入れることで活力を生み出しています。大学の構成員には、そうした多様性を尊重することが求められます。個々の学生に対応する場合は、多様な立場を考慮しましょう。また、同時にキャンパスに多様な学生がいることがいかに重要であるかを学生に伝えましょう。

- 窓口対応では、個々の学生の置かれている立場や経験を考慮する
- 学生が抱える問題の内容に応じて適切な機関や専門家などを紹介する
- 留学生との異文化交流を希望する学生には、関連するプログラムやサークルなどを紹介する
- 社会人学生などの要望に対応できるように、手続きや連絡の方法などを工夫する
- 種々の機会を通して、現在の学生の特徴や多様性を理解する
- 順調な学生生活を阻害するさまざまな要因を理解し、支援できる環境づくりをする
- 教職員の多様なキャリアや就業スタイルを認め、大学が多様性を尊重していることを学生に知らせる

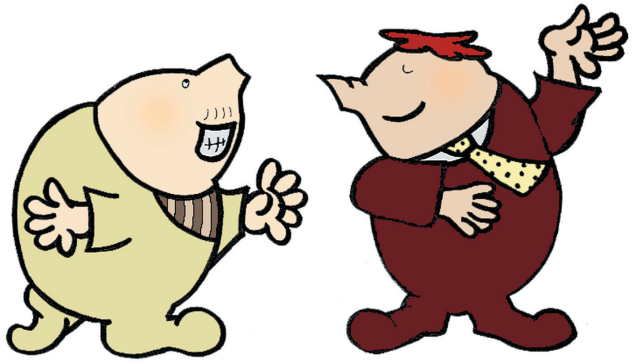
お知らせ

1. 本冊子に収録できなかったアイディアや他の分冊の内容（学生編、教員編、大学編、IT活用授業編）をお知りになりたい方のためにホームページを作成しました。

   http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/

2. この冊子をお読みになった感想、改善案、本冊子に含まれていない重要なアイディアなどのコメントをぜひお寄せください。また本冊子をご入用の方もご一報ください。

連絡先：　メールの場合は、info@cshe.nagoya-u.ac.jp
学内便の場合は、高等教育研究センター宛



本冊子作成のために参考にした主な文献

池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹（2001）『成長するティップス先生－授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部.

中井俊樹（2007）「大学教育の質向上のための教員・学生・大学組織の役割と相互関係－『ティップス先生からの7つの提案』を活用した教授学習支援」『大学評価・学位研究』, 第 5 号, pp.1-16.

中井俊樹・齋藤芳子（2007）「アメリカの専門職団体が描く学生担当職員像－学生担当職のための優れた実践の原則」『名古屋高等教育研究』第 7 号, pp.169-185.

中島英博・中井俊樹（2005）「優れた授業実践のための7つの原則に基づく学生用・教員用・大学用チェックリスト」『大学教育研究ジャーナル』第 2 号, pp.71-80.

名古屋大学高等教育研究センター（2005）『「ティップス先生からの7つの提案」の開発』特色GPシリーズ 3 号.

福留留理子（2004）「大学職員の役割と能力形成－私立大学職員調査を手がかりとして」『高等教育研究』第 7 号, pp.157-176.

山本眞一（1998）「大学の管理運営と事務職員－管理運営論への新たな視点」『高等教育研究』第 1 号, pp.163-177.

American College Personnel Association and National Association of Student Personnel Administrators（1997）*Principles of Good Practice for Student Affairs*.

Barr, M. and Desler, M.（2000）*The Handbook of Student Affairs Administration,* Jossey-Bass.

Blimling, G. and Whitt, E.（1999）*Good Practice in Student Affairs: Principles to Foster Student Learning,* Jossey-Bass.

Chickering, A. and Gamson, Z. (1987) "Seven Principles for Good Practice in Undergraduate Education", *AAHE Bulletin*, Vol.39, No.7, pp.3-7.

Whitt, E.（1997）*College Student Affairs Administration*, ASHE Reader Series, Simon & Schuster Custom Publishing.

開発スタッフ

名古屋大学高等教育研究センター

戸田山 和久
夏 目 達 也
近 田 政 博
中 井 俊 樹 （プロジェクトチーフ）
鳥 居 朋 子 （現在、鹿児島大学教育学部）
齋 藤 芳 子

名古屋大学学務部学務企画課

イラスト

スコーレ株式会社

ティップス先生からの7つの提案〈教務学生担当職員編〉

2007 年 5 月 25 日 第 1 版

著者　名古屋大学高等教育研究センター
名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-5696
info@cshe.nagoya-u.ac.jp

印刷　株式会社ダイテックホールディング
名古屋市東区主税町4－85
TEL 052-856-6645　FAX 052-856-6646
odp@daitec.co.jp

© 名古屋大学高等教育研究センター
2007. Printed in Japan

ISBN978－4－901730－98－3